



自分が入らなくてもいい施設

「柔軟な発想」や「発想の転換」とは、どのようなものなのか。お茶はお湯でつくるものという既成概念を覆した「お茶の水出し」から何を学ぶことができるのか。本

てもいい施設へとめざすものが変わったという特別養護老人ホームの施設長の話を聞いたとき、「あつ、これだ!」と思った。実践し、考え直し、また実践を続ける。現在は「氷出し茶」の例に基づいて、視座そのものの位

転期に立つ経営の視座⑨ 和敬静寂(茶道の心得)

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に『99の言葉の杖』(日本医療企画)、『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人材創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ!経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

<http://www.hayakawa-planning.com>

ブログ: <http://ameblo.jp/hayakawa-planning/>

誌1月号で紹介した「氷出し茶」の話聞いた、ある塾生は次のような反応をした。

以前の私はどのような視座を持ち合わせていただろうか。仕事を続けるなかで、「自分が入りたい施設」から「自分が入らなく

置を変えて見ることに挑戦中である。また、次のような考え方を述べてくれた塾生もいた。

お茶を飲むことを介護、お茶を淹れるのに使うお湯を介護保険に置き換えることはできない

だろうか。この場合、お茶を飲むためにまずお湯ありきでよいはずはない。お茶を美味しく飲むには、急須もお茶碗も、もちろんお茶の種類、個人の好み、いつどこで誰と飲むのか、多様な背景がある。

お茶を美味しく飲むという本質を見極め実行するため、お湯を用いているわけだが、頭からお湯を使うということにとらわれてはいないだろうか。

「発想の転換」とは、誰もが当たり前だと思っていることに疑問府を投げかけること。「お茶はお湯で淹れるもの」という常識にとらわれず、水で入れるお茶もあるという視座を確立させることが「柔軟な発想」につながる。

利用者が本当に望んでいることとは、何か。自分らしく豊かな生活を送ること、お茶の例えでいえば、自分好みに美味しくお茶を飲むことである。

利用者の声をしっかり聞き取っているのだろうか。発想力は発見力であり、「今後さらに多様性が高まる利用者の生活を支えることである」と認識することができた。

お茶を濁してはならない

何気なく使っている「お茶を振る舞う」という表現には、お茶を「馳走する」とともに、特別に趣向を凝らすという意味も含まれている。果たして、このことを意識している介護職員はいるだろうか。

ある施設ではお茶の淹れ方を学ぶ機会を設けて、受講者全員にその手順書の作成を促したという。10項目程度しか思い浮かばなかった人もいた。100項目も記した人もいた。お茶を淹れることが目的である人、そうではない人。書き記された手順に雲泥の差が生じたのは、言うまでもない。

ありふれた平凡な物事のことを日常茶飯というが、ベクトルから注げば簡単にお茶を飲むことができる時代だから、意識や感覚にブレが生じる。そこで、事業所の姿勢を「和敬清寂」の茶道の心得に求めたという。「和」の心で互いに認め合えば、「敬」い尊重し合う気持ちが生まれ、職員は「清」らかな心を得て、「寂」すなわち悩みや迷いのない純粹・透明さに結びつくような組織の土台をつくり出す。お茶を濁してはならない。